せっかく離婚したのに

泣言遊太郎

一

♫ノンノンノノン　ノンノンノノン
今日は　私の　離婚記念日です♫

田頭紀香の一日は、この日もこの歌の鼻歌で始まった。もちろん、これは一九七〇年代のアイドル石野真子の『失恋記念日』の替え歌である。

田頭の同居人でこのアパートの主でもある佐藤水は、深い溜息を落としてから田頭を横目で睨んだ。

「おい、今日は俺の就職面接試験の日だろうが。今日位はそのしょうもない歌を止めて、たまにはトンカツでも作って、頑張ってネ――と優しい言葉の一つでも掛けれんのか、女なんだから」

「あら、あたしに料理や優しさを求めるの？　三年も一緒に住んでるのに、まだそんな馬鹿な事を考えてるの？」

「……」

「それにね、頑張ってという言葉位に人を追いつめる言葉はないの。結果なんか気にせずに楽しんで来てね――が正解なの。……という事で試験楽しんできてね」

「……」

佐藤水は五十一歳。田頭紀香は三十二歳。

年齢差がある割には、言い争いとなると間違いなく田頭が完勝する。

「水さん、今日の水さんの表情硬いわ。それに今日は溜息が多いわ。溜息はオナラより劣るの。無愛想は殺人やニセ札造りより罪が重いの。悩まない門には福来たるよ。余裕の笑顔で今日を過ごせば、今日は絶対に素敵な一日になるわ」

十五年前、妻由美と離婚して自暴自棄になって酒場に入りびたっていた頃、見ず知らずの女が近寄り、

「あら、アナタ。信じられない位に波動が悪いわね」

と何の遠慮もなく顔を近づけて、

「よくそんな梅干とレモンと唐辛子とわさびを一緒くた口の中にいっぱいに詰めこんだような顔ができるわね」
――と、初対面の人間の顔で大笑いされたというのが、田頭紀香の出会い。
それ以降、田頭は佐藤にまとわりつき、追いかければ追いかける程、田頭は楽しくて楽しくて仕方ないのに対し、佐藤はムスッがムスッムスッになり、やがてムスッムスッムスッとイライラは増していった。
それでも、田頭は追っかけを止めず、とうとう佐藤のアパートに住みついてしまった。
いわゆる押し掛け女房というヤツである。

突如始まった共同生活から三年が過ぎ、佐藤は田頭に知らず知らずに調教されてしまった感がある。まず、人生を絶望していた領域からは抜け出せたと思える。
怒ったり、愚痴ったり、佐藤が不機嫌な時には、
「勿体ないわ、短い人生でそんな顔なんかしたら……。せっかくの素晴らしい一日をドブに捨てるようなもんだわ……」
――と言うなり、田頭はパソコンに向かって何やらパチパチ打ち込んでいる。機械オンチの佐藤は何をやっているのかサッパリわからない。
とにかく、一日中パソコンと向き合っている。何をしているのか、聞いても田頭は全く答えないが、これでかなりの収入を得ているのは確かなようだ。
「美人の辞書には、過去という文字はないの。だから私の事は何も詮索しなくていいの。それから美人の辞書には緊張という文字もないの。自分が心から思う事を行うのが美人の義務で、人が自分をどう思おうかなど気にならないから、美人は緊張など感じないの」
――と、日常会話の中で美人という言葉を頻繁に使用するが、どう贔屓目にみても、田頭の顔は美人という顔には程遠い。
だが何度も何度も美人と言う事によって、自分で自分が美人だと思っている。
それ同様、今日は素晴らしい一日になるわ――というセリフも何度も何度も繰り返しているから、毎日幸せに過ごしている。
そんな超ポジティブな田頭の紀香節に感化され、佐藤も少しは目に写る景色や満員電車の車両に詰め込まれる会社員・ＯＬ達にも、ありがとう・ご苦労様と心から思えるようになっていた。
そんな矢先、佐藤水が離婚後初めて勤めに出た会社がまさかの倒産をした。
（やっぱりな……）
不測の事態に遭遇すると、凡人はやっぱりな……が再燃焼し、心の中で高速回転し、どうせ俺は幸運の女神には無視される男でしかないと、自分で自分の人生を崩してしまう。
田頭紀香は、そんな時も平然と笑っていた。
「水さん。アメリカのビバリーヒルズの億万長者の方に、アナタの成功の秘訣は何ですかって尋ねたら、多くの人はこう答えたの。離婚とリストラ。この二つが、信じられない位

に私に幸運をもたらしてくれたって……ね。水さんはその二つとも経験してるのよ。あの人達の仲間入りが出来る――って事ね」
「そんな現実味のない話をしても何も始まらんだろう？　こちらは五十過ぎて職探し始める身の上。億万長者の話を今してる時じゃないだろう？」
「あら、年齢は関係ないわ。ケンタッキーのカーネルサンダーさんなんてあの年から全てを始めたのよ。間違いなく自分は成功できると思えた人だけが成功するの。全く根拠のない絶対的な自信を持つの。……長く話したら遅刻しちゃうわね。今日は、多分とってもいい日になるわ」
「……とりあえず、そろそろ行ってくる」

二

就職情報誌『仕事ミツカール』で四十歳までという文字が並ぶ中、
（年齢、経験不問、性格が明るい人なら、バツ一、バツ二でも大歓迎、持病なしの体力に自信ありで御年寄大好き人間なら五十、六十喜んで）
――という本気なのか冷やかしなのかわからないまるで保険のセールスみたいな広告文に妙に心が引っ掛かり、佐藤は面接第一号をこの会社に決めた。
職種は老人介護。
老人というと、十五年前に閉めた個人スーパー時代に買物に来てくれていたおばあさんの顔・顔・顔が浮かんでくる。佐藤は時間が許される限り、おばあさんの話に耳を傾けていた。孫の名前から年、旦那とのなれそめ、若い頃の思い出など事細かくノートに書き記されており、孫の誕生日、結婚記念日、また人によっては命日にも足を運んだりもしたものであった。
佐藤水は、面接会場の待合所で面接試験を終えて部屋を出てくる人間、順番を待つ人間の表情を見渡しながら、そんな昔の記憶を手繰り寄せていた。
ここに来ている人間が、これまでどんな暮らしをしてきたかなど知る由もないが、事情はさておき、職を失くしてやって来ている事だけは確かである。
瞳は床に落とし、足どりの重い者だけだ。
たった一人、妙にニヤニヤした男が図々しく競馬新聞を広げ、小指を耳の中に突っ込んで耳垢をほじくり出しながら、待ち時間が長く待ち遠しそうなポーズをひけらかしている。
髪はボサボサ、服装の着こなしも出鱈目なこの男と一瞬視線が合い、佐藤は軽く会釈をした。
募集人員七人の所に百二十余りの応募があり、狭き門の所に出向いている立場にある人間にしては、この待ちっぷりは大したものだ。
そんな時、
「次、五十七番、佐藤水さん。面接室にお入り下さい」

佐藤水の名前を呼ぶ声が響いた。

三

佐藤は面接会場の部屋の扉を開けた瞬間、約三秒間息が止まった……というか呼吸するの忘れ、心臓も鼓動を忘れ、半開きに開いた口は閉じるの忘れ、ビデオの一時停止のような状態で固まった。

右と左に高級スーツを身に纏った男をはさんで、デーンと真ン中に超派手な衣装で、まるでアメリカ大統領夫人か、英国皇室の女王かという風に座っていたのは十五年前に別れた佐藤水の元妻・由美であった。

「由美……」

鳩が豆鉄砲の二十連発を喰らった顔とでもいうのであろうか？　佐藤は呆然と立ちつくし言葉を失ったまま元妻を見つめていた。

「……。びっくりした……。まさかこんな所で再会するなんてな……」

佐藤は由美に、何を話しかけていいやら、頭の中で様々な言葉がもつれてどれを取り出せばいいのやらと思い巡らしている時、冷静な実に冷静な口調で命令を下されたのであった。

「面接者は私語を禁じます」

「……」

それから履歴書を見ながら由美は言った。

「佐藤水さん……。水さんっておっしゃるのね。変わったお名前ね」

「変わった名前って、自分の元亭主の名前位は覚えてるだろう？」

「面接者は質問にのみ答えるように」

「……」

それから由美は、右と左の男に向かって言った。

「常務、しばらくこの方と話をさせて頂けないかしら？　二十分間だけ席を外して頂戴」

「しかし、麻丘社長……」

「お願いします」

「……はい。では二十分間退出します。お知り合い……ですか？」

「ええ、少しだけ……」

この常務と呼ばれる男と由美とのやりとりで、佐藤は由美の会社での立場が社長である事、それから会社での力関係が、男たちよりかなり上である事が読み取れた。

男達が部屋を去ると、由美は立ち上がり水の方に近づいてきた。

それから、夫婦である時には見せた事のない爽やかな笑顔を水に投げかけていた。

「麻丘社長か……」
「そう麻丘社長なの……。結構有名人なんだけど、全然知らないみたいね」
「ああ……。全然、全くさっぱり想像も出来ない」
「そりゃあ想像出来ないでしょうね。でも、私は、今日水さんが驚いてビックリするのは十分に想像出来たわよ。だってね、今日水さんがここにやって来る事は知ってたの。ふふ、ごめんなさいね。色々と話したいけど、今は面接中だし、今晩ここに来てね」
そう言うと、地図の書かれたメモ用紙を渡し、甘えるように悪戯っぽく横目で水を睨んだ。別れた十五年前よりも若々しく魅力的である。
「ひょっとして、私に変なわだかまりがあるなら、別にいいのよ」
「それはない。行くよ」
「じゃあ今夜七時半、これもうちの会社なんだけど、東京ハッピーホテルのロビーでね。……あ、就職試験は合格よ。私からのプレゼント。頑張ってうちの会社で働いてくれる……わよね？」
「ああ、おまえさえよきゃあな」
「あの……。会社の中では、おまえなんて呼ばないでね。私の事は社長って呼んで。それから、元夫婦って事も口外しないようにして。その方が、お互いやりやすいでしょう？」
「そりゃあそうだろうな……」
「じゃあ、今夜遅れないようにね。はい、面接試験はこれで終わりです」
そこで、また由美はニカッと笑った。

四

ハッピーカンパニー・ショパン＆シンデレラ。
これが、麻丘由美代表取締役社長を頂点とする全国一万五千人の従業員持ち、海外に二十五の支店を持つ会社名である。
エステ、輸入雑貨販売、リゾートホテル、それから、佐藤が職探しにやって来た老人介護のホームは全国に二十二ヵ所に点在する。
それから、由美の仕事の肩書きには、他にもスピリチュアルカウンセラーと、日本女社長ガッツの会の会長とある。
佐藤はこの日アパートに帰ると、同居人の田頭紀香より元女房の由美の説明を受けた。
十年足らずの間に小さく立ち上げた会社がみるみる大発展し、カリスマ女社長と呼ばれ出したかと思うと、あれよあれよと全国屈指の億万長者となった事。
テレビ・雑誌などマスコミに顔を出さないが、ショパン＆シンデレラのついてるおばちゃんという長い長いペンネームで次々と本も出版し、
『神は果物を造り、人間は胃薬をつくった』
『今日も元気なアホの二代目』

『酒人公〜酔ってる奴にはかなわない』
——と、どれもがベストセラーになった事。
知らぬは元亭主ばかりなり。
あちらは知らぬ間にどんどん有名になっているようで、話を聞けば聞く程、佐藤は由美が由美でないような気がした。
それから、十年余りの結婚生活をいくら掘り起こしても、何処にそんな才能が眠っていたのかなど、何一つ思い浮かばなかった。何しろ本を読んでいる所など見た事もない。

そんな事を思い浮かべながら、佐藤は由美に言われたとおりに、東京ハッピーホテルのロビーに約束の時間より三十分もはやく足を運んだ。
一流ホテルのロビーに一歩足を踏み入れると、右に左に流れる人波が、自分とは別世界に迷い込んだような感じがした。
そんな中、遠い昔に個人のスーパー佐藤商店、従業員が二人だけの小じんまりとした小店を経営していた時、淡いピンクの佐藤商店と書かれたTシャツを着ていた由美の笑った顔を佐藤は思い出していた。
オリジナルのTシャツを造るのにスヌーピーのイラストをどうしてもプリントアウトしたいと無邪気な笑顔、子供みたいな仕草を回想していたその時……。

ホテルの正面入口にリムジンが静かに止まり、男に敬礼されてドアが開かれると、中世の貴族が着るような艶やかなドレス姿で降りて来たのは由美であった。
映画のスクリーンから飛び出してきたような衣装で、運転手にそのまま帰るように手で合図すると、佐藤の方に手を上げて大きく左右に振った。
まるで二人の過去に何もなかったような笑顔だ。

「ごめんなさい、待った？」
「いや、つい先来た所だ。でも、こんな所には不似合いな男がいると、長くも感じたわ」
由美は目でクスッと笑った。
「御食事は私に任せていただける？　ふふ、心配しなくても、割り勘にして……なんて言わないから……」
佐藤は、由美の高級服やセレブなバッグや装飾品を見ながら、
「おまえ変わったな……」
——と、つぶやいた。
「そりゃあ変わるわよ。十年以上も月日が経ったんだもの。水さん……」
「ん？　何？」
「あなた今、心の中であたしの事、老けたなあ……。小皺ふえたなあ……って言ったでしょう？」

悪戯っぽく横目で睨むと、由美は水が返答する時間も与えずに、矢継ぎ早に喋った。
「いいのよ、人間って思ってる事を何でも正直に出して言ってたら、日本中トラブルだらけになっちゃうものね？　あっ、ここのエレベーターに乗るわよ」

佐藤は何かハリウッドの国際派女優についていく小犬にでもなったような錯覚におちた。
人間は金ではない。
しかし、身につけているものの総合計金額が百倍位に差をつけられると、流石にいじけてしまう。（cf.佐藤水・スーツ・腕時計・下着・財布等、総合計七万八千円。麻丘由美・ドレス・宝石・バッグ等々で総合計七百九十二万円）
由美は、そんなおどおどした水の素振りを笑いながら見つめて言った。
「水さん。もっと堂々としていて。あたしね、月に一度だけ恋人がわりをしてくれる六本木のＮＯ１ホストの夢君っていう子の方がデーンと構えてるわよ。まだ二十三歳よ。まだこの世界に入って一年余りの子よ。病は気からって言うけど、貫録も気からなの。だからもっと胸張っててね」
「……うん……。頑張ってそうするか……」
「ふふ、人の説教してたらお腹すいちゃったわね。夜景でも観ながら御食事しましょう。水さん、素敵な夜をもっと楽しみましょう」

五

スカイビューバーとか呼ばれる場所に足を踏み入れると、誰もが由美の方を見て深く一礼する。日本中を飛び回る社長が来た時は、こういう応対をしろと教え込まれたとおりにする。
社名の一部にもなっているショパンの曲を一流のピアニストがピアノを奏でている。
由美は、自分のホテルというより、我家にいるような顔つきで、
「とりあえずドンペリを二本。それからおすすめのメニューをてきとうに持って来てくれる？」
と、優しい声でオーダーをした。
「水さん……」
まだ固さのとれない水に、由美は笑いながら尋ねた。
「十五年って過ぎてしまえば速いものね」
「そうかもしれんな」
「でも、やっぱり色々な出来事、信じられない奇跡、夢か幻のように叶い続けたりの連続で、あんまし頭のよくない私は、何で水さんと離婚しちゃったかも忘れちゃったわ……」
「……。何が言いたいのかよくわからないが……？　今日は、恨み事の一つでも言われる事は覚悟して来たけどな……」

「恨み事――？　人生は短いのよ。そんなつまらないものに時間をさいてちゃ勿体ないでしょう？　執念深い・愚痴・言い訳・悪口……なんてものは、うちの会社では一つにつきマイナス五千円なの。ちゃんと給料明細書の下に書いてるのよ。アナタハ愚痴ガ多イノデ五千円マイナスデス――って。本当は給料でひかれるより、もっと本人は損してるんだけど、気づかない人が多いのね。……駄目だ。また社長の御説教モードになっちゃったわね。そんな事より、あれから、素敵な女性現われなかったの？」

「まあ、成行で一緒に暮らしているのが一人だけいるけどな……。四捨五入で二十も若い娘だが……。まあ一人だけ……」

「一人でいいわよ、回教徒じゃないんだから……。何人もいたら問題を起こすわ」

由美は終始笑顔を崩さない。

それは十五年の年月が流れたせいではなく由美の変貌のせい、心の持ち方が百八十度変わったからであろう。

身なりもそうだが、この屈託のない多くの人を引きつける魅力的な笑顔は、水には何か別人と話をしているという感が拭えなかった。

水は、そんな心の中を隠したまま尋ねた。

「そういう社長は……」

水はついここで社長と呼んでしまったが、由美は即にプイと怒った素振りをして、プイと頬っぺたを膨らませた。

「会社の中では社長って呼ぶように言ったけど、こうして二人っきりの時は、社長なんて呼ぶのはやめて」

「すまない。気をつける……。……で、人の事より由美の方はどうなんだ？」

「私、日本女社長ガッツの会っていう会の会長してるんだけど、平均年齢四十五歳の女社長さん等と同じで恋愛オンチなの。本命の前では、純情な中学生みたいでドン臭いの。ビジネスでは成功し続けている彼女達も、男と女では失敗の連続って女性だけなの。でも社長なんてものやってると、いつでも笑ってなきゃいけないのね、古事記が餅もらったみたいにね……。だから、女社長ガッツの会なんてものは、本当は泣きたい者が集まってグデングデンに酔ってクダをまいてもいい一日っていうのを作ってるだけの事。長くなりました。私もそんな一人っていうだけの話」

「色々とストレスも溜まるって事か……？」

「一言で片付けるならそうかもしれない。でも、女社長ガッツの会の会員の女性の方のストレスは良質で、ポジティブなストレスだから、明日になればコロッと回復するストレスしか持ってないの」

「ストレスにもポジティブなストレスとネガティブなストレスとあるのか？」

「そう、あるの。あいつのせいで、会社のせいで今自分はこんなにストレス溜まっちゃった……というのが、ネガティブなストレス。責任他人論の人のストレス。反対に、私はこんなに素晴らしいのに、どうもうまくいかないのは、きっと神様の無邪気な悪戯ね、私を

ためしてるのね……。こういう能天気な責任自分論のストレスがポジティブなストレスね」
「スピリチュアルカウンセラーって仕事もそんな事を喋っているのか？」
「あの仕事は、必死で相談者のために私が経験した事で何かお役に立てそうな話があれば、そんな事だけを思い巡らしてする脳の中の格闘技ね。だから、何を喋ったか、何をアドバイスしたかは半分以上覚えてないの」
「そうなのか……しかし、想像がつかないな。おまえが先生と呼ばれて慕われて姿なんか……。それで、まさか法外な金額をとっているんじゃないだろうな？」
「お金はもらってないわ」
「もらってない……？」
「ええ、一円ももらってないわ。――というよりもらえないわ。仕事の合い間に、知り合いの方から、この子の話を聞いてやってくれるかって頼まれた時に、少し相談に乗ったのが最初。その子が見違えるように元気になってね、それから玉の輿に乗ってセレブな奥様になると、次から次に頼まれるようになって……。はっきり言って半分は嫌な人。自分の生き方を真剣に考えている人にだけ、少し力になってあげられたらいいな……位でやってるものだから、お金はもらわないの」
「う～ん。本職じゃないって事か？　……で、何人位の人間を見たんだ？」
「五十七人。ひょっとしたら前世から因縁でこの方と出会ったのかなあ――なんて勝手に想像してるので、五十七人ともどんな方か、名前も将来の夢も今の生活の不安も、みんなメモしてるわ。ほとんどの人は素敵に成長しちゃったから、今はもう必要のないモノかもしれないけど……」
「ついでに俺を見てくれるか？　俺も成長出来るか？」
「もちろん出来るわ。誰だって出来る。水さんの場合はたった一つだけね。女性を大切にする。これからは、女性を大切にするの。そうすれば、素晴らしい未来が待ってるわ」
「何か今まで俺が女の人を大切にしてなかったみたいな言い方だな。それにその言葉は、スピリチュアルカウンセラーとして言ってるのか？　元女房個人由美として言ってるのかどっちなんだ？」
「どちらもよ。水さん、今日は私こんなに着飾っているのに、奇麗とも素敵な服ね――とも言ってくれない。こういう男性は一日一日罪を重ねてるの。そういう風に言ってもらおうと無駄な努力をしない女性も罪を重ねてるの。人をほめるっていうのは、その人の素晴らしさを見つけるっていうのは、人間の義務なの」
「なるほど。そういう意味で、俺は女性を大切にしてなかったって事か」
「そう、特に水さんの奥さんだった女性に、十年も余ってロクに御世辞の一つも言わなかった事に、一日の終わりに一分でいいから懺悔するっていうのも、これから先の水さんの人生を良くするための一つのいい提案かもしれないわね」
「……」
「冗談よ。そんな真剣な顔をしないで」

それから由美は他愛のない話を続け、席を立とうかという時にニッコリ笑って言った。
「水さん。ウォー・アイ・ニ」
「？？　……今何て言ったんだ？」
「ウォー・アイ・ニ。中国語よ。後で調べておいて」
「……、ウォーアイ・ニ……だな？」
「そう。今日はありがとう。素敵な夜だったわ」

夜は優しく流れた。